



新東京百景 府美術館
逸見亨／画 昭和6年(1931)

木々が立ち並ぶ先には、ヨーロッパの神殿を思わせる列柱と大階段が特徴的な東京府美術館が見える。「新東京百景」は、関東大震災後の復興を遂げる東京の姿を描いたものである。さまざまな芸術家が集う東京府美術館は、復興後の東京を象徴する風景の一つとして本シリーズに取り上げられたのだろう。



上野風景・表慶館と美術館
小泉癸巳男／画 昭和12年(1937)4月

右奥に見える特徴的な緑の屋根の建物は、明治42年(1909)に開館した表慶館。左奥が東京府美術館(現・東京都美術館)である。力強いタッチと寒色をメインにしたわずかな色彩で構成される本作は、震災後の復興の中で、目まぐるしく変化する東京の近代的な光景を情感的に写している。

3. 不忍池

古くは東京湾の入り江だったが、海退などにより陸地化し、池として残ったのが現在の不忍池である。『江戸名所図会』によれば、「不忍とは忍の岡に対しての名なり」とあり、「上野の山」が忍ヶ岡と言われたことに対比して名づけられたとされている。

寛永2年(1625)、天海は寛永寺の創建に際し、比叡山延暦寺の近くにある琵琶湖の竹生島に倣い、不忍池に中島を築き、そこに弁財天を安置した。四季折々の風趣が特徴で、特に夏の蓮見は江戸随一の名所とされた。

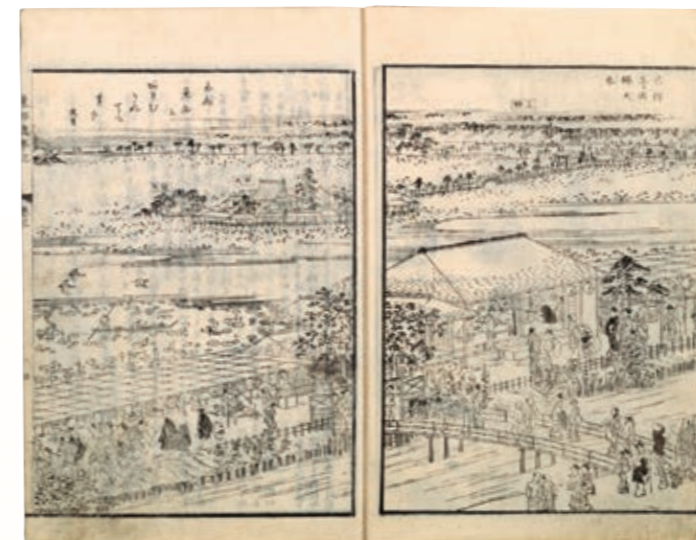
明治時代になると、博覧会や競馬の開催に伴い、次第に池の整備が行われるようになる。第二次世界大戦中から戦後直後にかけては、食糧不足を補うために一時的に稲田となるが、その後一部が上野動物園の敷地となり、現在の形へとつながっていくこととなる。



名所江戸百景 上野山内月のまつ
歌川広重／画 安政4年(1857)8月

「上野清水堂不忍ノ池」(8頁)にも登場した奇妙な松の枝を近景に据え、不忍池の向こうに広がる池之端の町屋と本郷台の大名屋敷を描く。この松は「月の松」と呼ばれ、形が満月を連想させることから名づけられたと言われている。

枝が画する円内には火見櫓が見えるが、加賀鷲と呼ばれる大名火消を有した加賀藩前田家上屋敷の北火見櫓であろう。定火消同心の家に生まれた広重は、火見櫓に対して思い入れが強く、本シリーズに度々描かれる。



東都歳事記 四編
(巳待忍ヶ岡弁天参)
斎藤月岑／編、長谷川雪旦／画
天保9年(1838)



らんじわくえどめいしよ
蘭字枠江戸名所
 えどしのばずべんてん どうえいざん みず
江戸不忍弁天ヨリ東叡山ヲ見ル図
 溪斎英泉／画 文政中期(1820~1825)

絵の周囲に、アルファベットのような文字を配していることから「蘭字枠」と呼ばれたシリーズもので、それにあわせて風景も洋風に描かれている。本図では、不忍池の湖畔から弁天堂と「上野の山」を望む。



えどめいしよしのばずのいけべんてんほこら
江戸名所 不忍之池弁天祠
 歌川広重／画 天保年間(1830~1844)

本図は、北側から不忍池や弁天堂を見た風景である。蓮見の季節や縁日の際には、画面右手に見える茶屋が繁昌したと言われている。弁天堂が建立された当初、橋は架けられておらず、弁天堂のある中島に渡るためには舟を利用するしかなかった。その後、参詣客が多くなったことから、寛文末期頃に中島までの道が造られた。

しのばず けい ば 不忍競馬

幕末から横浜の外国人居留地では競馬が行われ、外国人の社交場にもなっていたことから、欧化政策を進める明治政府の注目度は高かった。明治12年(1879)に皇族や華族らによって共同競馬会社が設立されると、アメリカ前大統領・グラントの来日に際して、陸軍戸山学校の隣接地(戸山学校競馬場)で競馬が開催された。

戸山学校競馬場では春・秋2回開催されたが、交通の便が悪いことから、共同競馬会社は農商務省から不忍池を借地し、明治17年(1884)に1周約1500~1600メートルの競馬場を建設した。同年11月には、明治天皇が臨幸するなかで第1回目が開催され、不忍競馬は国家的な行事として位置づけられた。しかし、馬券の販売は行わず、入場料や政府からの支援による運営は次第に行き詰まり、明治25年(1892)を最後に、不忍池で競馬が行われることはなかった。



とうきょううえのしのばずけいばのず
東京上野不忍競馬之図
 楊洲周延／画 明治17年(1884)10月

不忍池やスタンド、騎手など不忍池競馬場の全体を細かく描いている。画面上の花火と共に打ち上げられた福助や虎は袋物と呼ばれる紙製の人形である。それぞれにパラシュートが着けられ、風に漂いながらゆっくりと落ちてくるもので、来場者の土産ともなった。

なお袋物を発明した平山甚太は、日本で初の本格的西洋花火の制作者である。袋物は「Daylight Firework(昼花火)」という名称で、アメリカ合衆国の特許を取得した。

しのぼずの いけ へん せん
不忍池の変遷



み たてじゅうにし み しのぼず べんざいてん
見立十二支巳 不忍弁財天
 楊洲周延・延雪／画 明治26年(1893)

上部のコマ絵に十二支に関連する名所や祭礼を描き、下部に市井の人々を描いたシリーズ。楊洲周延が下部の人物、門人たちがコマ絵を分担した。

本図は、箏を弾く女性の背景に、門人の延雪が「不忍弁財天」を描く。弁財天の化身である宇賀神の体がヘビ(巳)であることから、弁財天と巳は深い関係にあった。現在、不忍弁天堂では毎年「巳成金」という大祭が行われている。

しのぼず ちはんうちゅうず
不忍池畔雨中図

小林清親／画 明治時代前期

雨の降る中、親子と思われる二人が不忍池の畔を歩いている。蓮の花が咲いていることから、季節は夏頃だろうか。画面中央には弁天堂が見え、上野広小路側から眺めた構図であることがわかる。

本図は、雨を直接的に描写していないのが特徴である。曇り空や人物の表現に加え、灰色と茶色を斑にして道がぬかるんでいる様子を表し、雨が降っていることを暗示している。



1



上野御山浅草御蔵三御屋敷三町四方之図
 安永8年~天明6年(1779~1786)

2



東京上野公園地実測図
 内務省地理局量地課／作
 明治10年(1877)

3



東京市下谷区全図
 東京郵便電信局／版權
 北島茂兵衛／発行
 明治29年(1896)6月2日

4



東京市下谷区
 東京通信局／編
 大正10年(1921)9月15日

5



**大東京区分図 三十五区之内
 下谷区詳細図**
 植野録夫／著、東京地形社／発行
 昭和12年(1937)1月15日

6



**東京特別都市計画図
 台東区(下谷)**
 東京都建設局／監修
 社団法人復興土地住宅協会／発行
 昭和26年(1951)2月5日

7



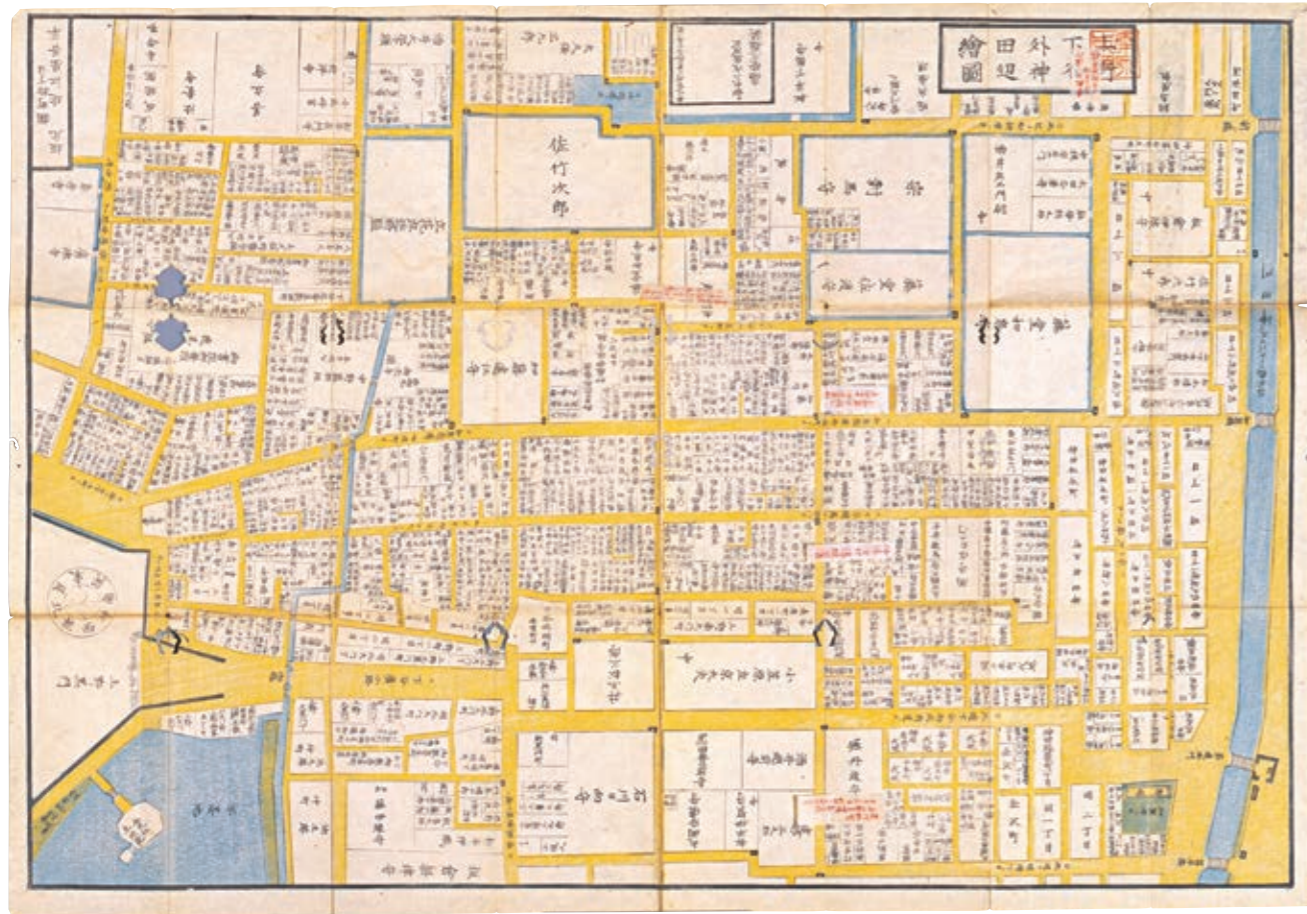
東京都市計画図 台東区
 社団法人復興土地住宅協会／発行
 昭和35年(1960)10月

- 1 江戸時代の不忍池
- 2 江戸時代に造られた土堤が残っており、土堤に並木、池の北西には桑が植えられている。
- 3 不忍競馬によって池の外周が整備され、北西の凸状部分も埋め立てられる。
- 4 明治40年(1907)の東京勸業博覧会で、中島から西へ観月橋が架けられる。
- 5 大正13年(1924)、池の管轄が東京市に移管されると観月橋は撤去され、築堤が建設される。
- 6 第二次世界大戦中から戦後にかけて、食糧不足を補うため、池の一部が埋め立てられ、一時的に田圃になる。
- 7 上野動物園の拡張に伴い、池の北側の一部が動物園の園域になる。

*小松愛子「あるく 不忍池のかたちとその変化」池享他編「みる・よむ・あるく 東京の歴史5 地帯編2 中央区・台東区・墨田区・江東区」吉川弘文館 2018をもとに作成。

4. 下谷広小路

江戸時代以前は下谷村という地名であったが、寛永寺が創建されると、天海の支配地であったことから「大僧正町」とも称されたようである。明暦3年(1657)の「明暦の大火」を契機とする幕府の防災政策の一環として、寛永寺黒門前の通りを拡大して広小路が設けられると、下谷広小路と呼ばれるようになる。呉服店や料理店などの町屋が立ち並び、寛永寺の門前町として賑わいを見せた。なかでも尾張徳川家や加賀前田家の御用を務めた「いとう松坂屋」(現・松坂屋上野店)は、この地域を象徴する建物として、現在まで街並みとともに変化してきた。



おみやばんえどきりえず
近江屋版江戸切絵図
そとかんだしたやうえのあたりえず
外神田下谷上野辺絵図
嘉永3年(1850)

寛永寺の黒門の前には、不忍池を水源とする忍川が流れており、渡るための橋が三つ架けられていた。中央に将軍が寛永寺に参詣する時のみ使用する「御橋」、両脇はその他の者が通行する橋になっている。



めいしよえ どひゃけい したやひろこうじ
名所江戸百景 下谷広小路
歌川広重/画 安政3年(1856)9月

下谷広小路は、寛永寺へ参詣するためのメインストリートであったことから、多くの人で賑わった。火除地でもあったため道幅が広く、本図では腰に刀を差した武士たちや「上野の山」へ花見に向かうであろう一行らが確認できる。

画面右の建物は、呉服問屋の「いとう松坂屋」。のちに百貨店の松坂屋となり、現在でもこの地で営業を行っている老舗の店である。安政2年(1855)の大地震で店舗が焼失し、翌年再建したため、本図は再建後の様子を描いたものと考えられる。

うえのひろこうじ まつざかや ごふくてん
上野広小路松坂屋呉服店
大正7~12年(1918~1923)

明治40年(1907)の東京勸業博覧会の際、松坂屋は江戸時代から続いた座売りからショーケースを並べた陳列販売に転換した。販売方法を変えたことで売上げは倍増し、百貨店としての基礎が確立する。その後、第一次世界大戦後の好況もあり、大正5年(1916)に第1期、翌年に第2期工事が行われ、木骨石張り4階建ての店舗が完成した。



だいてうきょううえのまつざかや ごふくてん いかん
大東京 上野松坂屋呉服店の偉観
昭和4~7年(1929~1932)

関東大震災によって類焼した店舗は、昭和4年(1929)に建て替えられた。建築家・鈴木禎次が設計し、地上7階・地下1階のルネサンス様式の建物として、上野を代表する建物となった。また、民間初の自動電話交換機を導入するなど、最先端の百貨店としても注目された。